

死を前にした意味の位相の転換

奥 山 敏 雄

はじめに

死にゆく人が抱える苦しみには様々なものがあるが、その中核にある苦しみはスピリチュアルな苦しみであると言われている⁽¹⁾。死や死後の世界への恐れなども含みながらも、生の意味喪失の苦しみがスピリチュアルな苦しみの核になっている。この苦しみが緩和されるために、「やり残したことをやり終える」こと、「最後の希望をかなえる」こと、そのことによって自己実現を果たし、成長を逃げるのが重要だと言われる⁽²⁾。これは医療の専門家のみならず、われわれにとってもなじみ深い発想である。だからこそその発想にとらわれてしまい、かえって意味喪失が深まるということがあるのではないだろうか。死が切迫した末期になるほど、あるいは、事故や脳神経系疾患によって身体の能動性がほぼ喪失した場合も、「やり残したことをやり終える」ことは極めて困難になるだろうし、身体性の解体とともに「何かを為す」こと自体が不可能に近くなるだろう。そうした生は無意味でしかありえないのだろうか。

それでも生の意味を喪失することから人が救われることがあるとすれば、生の意味そのものの位相が転換することを通じてであろう。自己実現という物語化による意味とは別の位相の意味へと、死にゆく人のまなざしが大きく転換することを通じてであろう。それはどのようなまなざしの転換であり、そこではどのような位相の意味が見出されるのか。

以下では神経内分泌腫瘍で亡くなった精神医学者岩井寛が口述した『生と死の境界線』についてたびたびふれることになる⁽³⁾。このテキストには闘病記とは言いがたい異様な趣がある。1986年5月22日に岩井寛は亡くなった。その年の2月から死ぬ直前にかけて松岡正剛を聴き手として岩井が語った記録と松岡のコメントからこのテキストは作られている。意識が混濁するような鎮痛薬の使用を避け、死ぬ直前ぎりぎりまで意識を自分で支え、自分の意識を観察し、それを語ることが、岩井寛にとって意味ある生を生きることであり、それを実現するために松岡正剛という聴き手を必要とした。意味ある生を極限まで生きる実験の記録である。病いを得るまで自己実現という意味を生きてきた岩井が、意味ある生の極限へと突き進むにつれ、自己実現とは別の位相の意味へと開かれていくことになる。死

にゆく人が書いたテキストの中では、決して典型例とは言えないものであるが、生の意味について考えるという本論考にとっては重要な実例となるであろう。

1 リニアな時間軸の解体

社会が複雑に分化するとともに再帰的なメカニズムが形成され、流動化が進み偶有性が増大する後期近代においては、個人は多元的な領域で複数の矛盾した偶有的な役割をそのつど担わねばならず、自己アイデンティティからは社会的なコンテキストが消去される。その結果、自己は、語りを通じて自らをモニタリングし、絶えず語り直しを通じて作り変えられていかねばならない再帰のプロジェクトとなった⁽⁴⁾。そこで物語られるストーリーは、現在の状態を導出するように無限にある出来事のなかから有意な出来事が取捨選択されてリニアな時間軸上に配列されて構成されるものであり、リニアな時間軸上で自己の生の意味が作り上げられているのである。現代の社会においてリニアな時間軸上で作られている生の意味は典型的には、未来に実現することになる成果を目的とし、現在の生をその手段としての行為に縮約する意味づけである。しかし、人は間違いなくいずれは死をむかえいっさいを喪失するのであり、究極的には未来の成果はありえない。この究極の意味喪失を回避すべく、意味の物語化という枠内で対応しようとする試みが、「自分らしい死に方」の物語化であるが、そこにはいくつもの限界があるように思われる。

たしかに、病いに倒れること自体が、それまでの自己物語にはなかった現在の出現であるため、それは人生の中断であり、人生航路の海図や目的地の喪失という意味で「語りの難破」に他ならない⁽⁵⁾。重い病いになることは、自分の現在の状態が過去から導き出されるはずであったものとは大きく食い違い、その結果未来を考えることがほとんど不可能になってしまうのであり、その意味でそれまでの自己物語は解体の危機に瀕する。そこで物語としての自己を回復するために語り直しが試みられねばならない。その際に、大きな課題を乗り越えねばならないのである。

そのひとつは、物語の別の結末、すなわち今後の人生の別の目的が見出されねばならないということである。例えば、がんであることがわかった段階でも、語りは難破してしまう。それでも根治的治療がうまくいき、再発の不安をかかえながらも社会復帰できる人は、苦しみがながらも別の未来、別の目的を探し求める余地があるだろう。だが根治的治療ができず、そう遠くない将来の死が避けられないことがわかった場合はどうだろうか。そこで取られる戦略が、より直近の未来へと視界を限定し、その想定されるタイムスパンの中で実現できる目的を見出すことによって生の意味を把持することである。いわゆる「やり残したこと」をやり遂げて自分らしい生を全うすることが、人生の目的となりうるだろう。残され

た時間が短くなるにつれて、さらにより直近の未来へと視界を限定することを通じて、より小さな目的を設定していくことによりかろうじて生の意味を支えることになるだろう。この小さな目的を達成してすぐに死が訪れるのならば、それもそれほど悪い話ではないように思われる。生きていくためには、様々な方便によって視界を限定していくことがこの社会では日常的な生き方だからである。

しかし、たとえより直近の未来へとタイムスパンの限定をかけていったとしても、未来の成果を目的として設定し、現在の生をその手段としての行為に縮約する意味づけは破綻することになる。リニアな時間軸は客観的に存在するものではなく、何かを為しうることと相関的に擬制されるものであるが、死の切迫やそれに随伴する身体性の解体とともに、何かを為しうる可能性は限りなく低下し、リニアな時間軸は解体していく。もうなにをやろうにもできないし、もう間に合わない、気力の喪失とともにすべての能動的活動を停止するという状況が訪れる。未来というものがほとんど想定されえない場合には、目的という自己にとって外在する未来の出来事によって生の意味を外的に支えることは不可能になる。語り直しによって生の意味を見出し、自己を回復することは不可能になるのである。

2 身体性の解体

語り直しのためにはさらに別の課題がある。物語を語るためには聴き手としての他者の存在を必要とするが、そもそも自己物語を語ることは、自己の生の意味を見出す作業であり、自己自身を聴き手としてなされるいとなみでもある。とすると、語りが難破した後に自己物語の語り直しが可能になるためには、語りかけるに足る自己がまだそこに存在するというものの確からしさがなければならないのである。

突然重篤な病いに倒れ、未来の展望が全く失われるような場合、語りの難破によって自己は激しく動揺するのであり、まさに茫然自失の状態に陥ることもよくあることだ。そのような状態では、語りかけるに足る自己がそこに存在しているということ自体がゆらいでしまうため、語り直しは困難なものになる。とはいえ、このような茫然自失状態からやがて立ち直り、自己の存在の確からしさが回復していくことも見られるだろう。しかし、死が切迫した末期になると、もはやそのような回復は極めて困難になるだろう。語りかけるに足る自己がそこに存在しているという確からしさを支えている身体性そのものが、解体してくるからである。この局面にあっては、語り直しによって生の意味を把持することは不可能だと言わざるを得ない。

自己は身体と不可分である。身体性については、運動水準と知覚・感覚水準とを分けて考えておくことができる。暗黙のうちに遂行している運動水準と知覚・感覚水準の両者における活動やはたらきをつうじて、自分が経験する世界が作り上げられているのであるが、逆に両水準の活動のいずれもがそうした世界によっ

て深く規定されてもいる。そうした世界、これを日常世界と言ってもよいが、それを作り上げてきた活動が重い病いに倒れることによって阻害されるのであり、その結果、日常世界の自明性が崩れ、それとワンセットになっている自己が崩壊の危機に瀕するのである。

入院してきたときには元気に歩いてきたが、やがて歩くことができなくなり、自力でトイレに行くこともできなくなる。ベッドで起きあがることもできなくなり、ご飯を自力で食べることもできなくなる。このように「満足に〇〇できること」がひとつひとつ失われていくことは、自己を解体させる大きな要因である。ケアにおいて患者の生活上の所作の自立がQOLにとって重視されるのも、それが自己という意味世界の解体と不可分だからにほかならない。

さらに、がんの進行や治療の副作用などで、見えなくなる、聞こえなくなる、味覚がなくなる、あまりの痛みによって他の感覚が遮断されてしまうなどの知覚・感覚水準ではたらきが阻害されることは、そうした身体性の水準の確からしさと不可分のものである自己を解体の危機に直面させる。

岩井寛は情緒と意識との乖離をめぐって、興味深いことを語っている。

岩井「だから、情緒として生きている自分と、自分の生きざまを見つめている自分とを、どこで手を握らせていくか。それも一つの課題です。」

……中略、引用者……

岩井「ええ。自分自身で、これほど情緒と意識が乖離して感じられるということは、僕は今まででなかったわけです。」

……中略、引用者……

岩井「こういう状況に立ち至ってわかったことは、情緒と意識が分断されてるんじゃない。じゃないんだけど、自分の一個の存在の中で、肉体と意識と情緒というのはお互いに絡みあっているわけだけれども、それが別々に主張しあったりするときもある。そういうことが、今まで体験されていない世界だったということですね。

つまり、われわれはいつも五感がちゃんとそこにあるということは当たり前だと思いながら生きているわけです。ところが、実はそうじゃないんですね。五感がまずバラバラになっちゃって、五感の中で二つしか残っていない。きょうは音楽を聴こうと思ったけれども、耳がだめだとか、本を読めないとか、バラバラな五感が一つ一つ、おまえはこうだぞということを、現実突きつけられるわけでしょう。」(27頁～29頁)

こうしてバラバラな五感がひとつひとつ、見える自分の自明性を、聞こえる自分の自明性を突き崩していくのである。逆に言うなら、それまでの自己は、五感がひとまとまりになって、〈私の五感〉という身体性を作り上げていたことの自

明性に依存してきたのである。五感がバラバラになり〈私の身体〉として感受しうな一体性が解体するとともに、意識や情緒がその基盤となる私の身体性を失い、別々の方向へと乖離してしまうのである。このように私という存在を究極的に支える求心性そのものが解体することは、自己物語として語られる言語水準での自己の解体以上に、根源的な自己解体である。

自己の語りを生みおとすものは身体性の水準にあり、身体と自己は不可分のものである。物語は「傷ついた身体を通して語られる」ものであり、語ることは「身体に声を与えること」である⁶⁾。傷ついた身体は、様々な症状や、表現しようのない苦痛として何かを強烈に訴えてくる。しかし、その苦しみを語ることはそう簡単なことではない。語り出すことを傍で待っている人、その聴く耳の前で、ようやくかすかな声がこぼれ落ちる。その訴えに自ら耳をそばだて、そして私の声に耳をそばだててくれる他者の前で言葉にすることにより、ようやく身体の訴えにあるリアリティが与えられる。だが、言葉によって他者に対しても意味あるものとして表出される苦痛は、身体の発する訴えとはズレてしまう。「身体は言葉をすり抜けていく」のである⁷⁾。

岩井寛は、リンパ節が一日一日大きくなっていくことが現にさわった触覚でわかってしまい、「だから、確実に自分の細胞の中で自分以外の、ようするに自分に反旗を翻している反乱軍が増殖している」ことがわかってしまうのだという(79頁)。さらに岩井は、「顔やなんかのリンパ節もどんどん大きくなってくでしょう。それをどっかで切り取らなければいけない。顔でも何でも、これからいろいろなふうに入っていくわけです。だから、僕としては、こういう死に方は嫌だなあという死に方を、最悪な状況を突きつけられている」と語る(79頁～80頁)。こうして冷静に自己について観察し語ることにについて、松岡正剛は、それが「逆に一つの救いへの、魂の救済のあり方なのかもしれませんね」と問い返す。岩井も「そうなんです」と答え、続けて以下のように語っている。

岩井「そこでごまかしてはいけないという気はありますね。最後までごまかしてはいけない。ただ、肉体は刻々とそういうふうな形で崩壊し、変形していくわけですね。それについて、じゃ何が自分のよりどころかといえは、やっぱり「精神」なんです。だけでも、その精神も肉体に付随してあるものですから、どこまでその精神が正常の域にとどまっていられるか。それは、自分自身でもわからないですね。」

松岡「そういう意識に、肉体がつくりだす非自己的な暴発がおよんできたら、それを排斥するような、そういうドラマの葛藤も、先生の中にはもう起こっているんですか。」

岩井「ありますよ、それは。ですから、松岡さんと話しているときには、やっぱり客観化してしゃべっているわけでしょう。だから、攻防戦みたいな形で淡

々と話しているけど、自分自身では、内部で変化が起こっているということは、これはやっぱり非常に不気味な現象が起こっているわけですし、自分にとっては非常にせつない現象が起こっているわけですから、そういう自分と何かとの葛藤とか、恐れとか、不安とか、そういうものがないと言ったらうそなので、そういうものを濾過したものとして言葉が出ているわけでしょうから。」(80頁～81頁)

身体内部で刻々と変化が起こっていることがわかってしまうことは、「非常に不気味な現象」なのであり、「自分にとっては非常にせつない現象」である。傷は身体そのものとしてある。そこから発せられる苦痛は、言語によって同定されうるような「リアル」ではないのだ。苦痛はそうした「リアル」をたえず超えていくものなのである。こうして不可分のものとして身体と自己は絡みあい、身体の声が自己が聴き取り、それを語ることによって意味を与えようとしても、解体する身体苦痛は語りによっては回復し得ないものとなるのである。

3 〈今ここ〉の生

リニアな時間軸が解体し、身体性の解体が進むことによって、自己物語という形で生の意味を物語化することが不可能になってくる。だが未来が失われ、私の身体の確からしさが失われてくるからこそ、生きるためには意味が要るのではないだろうか。物語化された意味ではないとすると、それはどのようなものだろうか。

岩井寛は、生の意味の物語化が困難な状況になっても、なおぎりぎりまで意味を求めようとする。急激に増してきた疼痛と闘うことが苦行であると語った後に、次のように言う。

岩井「そういう意味では、いまの僕にとって何が一番救いかといえば、これは「死」ですよ。」

松岡「…救いに見えますか。」

岩井「救いですね。解放です。それを僕は前からしゃべろうと思っていたんですが、僕はそれは「完全なる自由」だと思っているんです。生きているときの自由というのは、限定された自由であるし、人間が選択するための自由である。でも、死んでからの自由は完全である。

だから僕には、こんな苦しい思いをしながら、なおかつ精神的な自己を保っていようという立場と、ああ、もうこんなことはやめた、全部責任を放棄しちゃおうという立場の両方があるんです。しかし、何もない空白というのもやっぱり恐ろしいですね。」(205頁)

「何もない空白」、すなわち「無意味」こそ恐ろしいと感じ、岩井は鎮痛薬で意識レベルが下がることの方を拒む。死というむこう側に行ったときの「完全なる自由」があるからこそ、そこに「入っていく登竜門としては、「人間としての自由」を、いかに苛酷であろうとも、それを避けてはいけない、引き受けなければならない」と語る（206頁）。その「人間としての自由」とは何か。

岩井「「人間としての自由」を、これはぎりぎりまで——自由と苦悩というのは、僕はやや近似のイコールの線でもいいというくらい、そういうものだと思っているんですよ。

だから、いまこうやって話しているのも、非常に胸は痛いし、おなかも痛いし、話さないでも済むわけだけでも、話すという自由を僕はここで行使しているわけです。つまり、話すということを僕自身が選んでいるわけです。だから、選択の自由の上に立ったいわば主体性を僕は持っているということですよ。」（210頁）

鎮痛薬によって意識レベルが下がることは、人間としての自由の放棄になる。岩井にとっては、生きているこの刹那において人間としての自由を放棄することなく、不条理ともいえるような苦痛を味わいながら、そこを通過することではじめて「完全なる自由」としての死という世界が開かれることになるという。身体性の解体とともに死すべき者として存在していることが否応なしに内側から突きつけられてくるにつれて、人間としての自由をぎりぎりまで生ききることを経路としながら、岩井のまなざしは自己を超えた世界へ、「完全なる自由」としての死へと向かっていく。そこでは人間としての自由を生ききることの意味合いも変化を遂げていくことになるのである。

岩井「なんかすべてを包みこんでくれる世界、これは確実に存在するというふう
に思うわけです。つまり因果関係において、いまここにいるということは、それを胚胎する一つの世界があるわけですから。また、その世界がなければ、ここにいるという現存在というのは成立しないわけであって。だから、それを僕は「空無の世界」と言っているんです。あらゆるものを胚胎した世界ですよ。」（211頁）

岩井「「死」そのものに関しては、僕はいま、何の恐れもないと言っちゃおかしいけれども、むしろそういう「空無の世界」に包まれていくんだという安心感がありますよ。」（213頁）

岩井「生命体としてのいわば一番中心は意識ですよ。意識を中心とした生命体というものは大いに歓迎される。しかし、意識を中心としない、つまり有機体

としての存在はそのままつぶしていく、というふうに思うわけです。それは、数万年の間にまた形を変えて、何かほかの植物になるか、生物になるか、これはわかりませんよね。……わからないけれども、そういう一つの大きなものの中に包まれているということはいえる。」(212頁)

岩井「人間というのは有限と無限の両義的なものを包含しながらずっと動いている。……中略、引用者……これは一つの地球、太陽系という全体ですが、それがもっと広がって、……中略、引用者……そういう宇宙の果てまで行って戻ってきて、宇宙までの直径を二百五十億光年として、その向こうにあるものといったら、……中略、引用者……わからないから無限であると一応定義するよりしょうがない。そういう定義づけられたものの中に入れるなら、太陽系や銀河系なんかが存在して、その中に地球というものが存在して、その中にいろいろな生物があって、人間があって、そういったものを一つの大きな法則で包まれている。その法則の中にわれわれは死というものを境にして還元されていくんだらうと思うんです。そういう還元された向こうの世界を僕は「空無」と呼んでいるんです。」(213頁)

このように、この日常世界の生から死へとまなざしがむかい、死を透過して見える世界が「空無の世界」であるという語りは、いかにも観念的であるように思われる。だが、それは〈今ここ〉における生の実感に裏打ちされたものなのである。なぜなら、日常世界の自己を超えた世界へ、死を透過した世界へとむかうまなざしは、反転してふたたび〈今ここ〉の生へと内在化しているからである。それはどういうことだろうか。

現在の肉体的苦痛についてこれでもかというくらい冷静に具体的に語り、錯乱状態になる可能性も指摘し、続けて以下のように語っている。

岩井「そういう「空無の世界」から、もう一度「いま」というものを、つまり現有、「いま」というものを、現在の有というものを、もっと簡単に言えば死の世界からいま生きている世界を見つめたときに、やっぱりそこにわれわれは、生きている意味というものを何らかの形で求めざるをえないということになってきますよね。

そうした場合に、じゃ「意味」とは何かといえ、それぞれの人によってみんな違うんでしょけど、その終局というのは、一つは時間、空間を含めた真実であると思うし、それから人間の意識を通して見た場合には、苦悩を含めた自由であると思うわけです。それが人間としてどこまで全うできるのか。それによって「空無の世界」に入り方が多少は違ってくると思うんです。それをより可能に、より実現できたときには、「空無の世界」に安心して入れる。」

松岡「……。」

岩井「納得できる。あとは任せられる。その先まで考える必要はないんです。それは、子供が揺りかごに寝かされて、そして静かに揺られるように、そういう「空無の世界」にそのまま悠々と寝ればいいのであって……。」(214頁～215頁)

自己の生を超えたむこうの世界へとむかうまなざしは、「空無の世界」へといたり、そこで反転してふたたび自己の生へとまなざしが内在化する。ふたたび内在化したとき、〈今ここ〉における刹那の生の全体性がより鮮やかに捉え直されているのである。そのことは「生きている意味」についての岩井の捉え方に現れてくるのである。

そこで見出される「生きている意味」とは、ひとつは「時間、空間を含めた真実」、すなわち、「現在の時空の中で、僕は自分の肉体が、あるいは精神が置かれた状況というものを事実として認めざるをえない」ということであり、「いま僕が、この時間、空間の中で感じ、あるいは感じさせられ、そして表現したい、あるいはせざるを得ないということがあるから、それをやっているんであって、それ以外の何ものである」ということである(50頁～51頁)。すなわち〈今ここ〉の刹那の生がすべてであり、それ以外になにもものもあり得ないということ、そしてその一瞬一瞬の生から問われているという自覚こそが生の意味なのである。したがって、生の意味を人間の意識を通して見た場合には「苦悩を含めた自由」であり、それは〈今ここ〉の刹那の生がいかに苦しみに満ちたものであらうとそれを放棄しないということであり、〈今ここ〉の刹那に内在して生きることの自覚にはかならないのである。

言い換えるなら、「時間、空間を含めた真実」とは、未来に実現すべき目的のための手段として今何かを為しているという擬制ではなく、〈今ここ〉で何かを感じざるを得ず、表現せざるを得ないという自覚、〈今ここ〉の生から問われているという自覚であり、〈今ここ〉の生はそれ自体として完結しているのだという感受である。〈今ここ〉を生きるとはこういうことだ。自由の意味も以前とは変質し、選択としての自由ではない。〈今ここ〉の生の現実には自分の思いやコントロールを超えたある種の必然として受動的に感受されるのであるが、そうした必然を最後まで感受して生きることが、すなわち刻々と問いかけられていることをしっかりと受けとめて生きることが、「苦悩を含めた自由」ということではないだろう。

さらに「空無の世界」へと還元され、そこから生まれてくる人間は、宇宙の一環としての生物であり、生物のそのまた一環なのであり、〈今ここ〉において、「自分が生きている連帯」というか、生かされている他者というか、生かされているもっと大きな存在というか、そういうものの中で「私」は生き、あるいは生きられている」のだと岩井は語る(208頁)。だからこそ岩井は、死が切迫した状況下で

も精神医療センターで他の医師へと自分の患者の振り分けをし、若い医師の研究指導をていねいに行い、松岡を前に語り続け、亡くなる数時間前まで依頼された記念論文集の原稿の口述をゼイゼイという聞き取れない呼吸音しか出なくとも続けたのである。

このような岩井の生き様を最後まで自己実現を追求していると解するならば、それは誤りである。岩井の最期の生き様は、自己の内部にある可能性を実現するとか、何かを達成するという能動的な意味の追求ではないことに、十分に注意する必要がある。むしろ全く逆に、〈今ここ〉の生を必然として感受しているのであり、〈今ここ〉の生は他者との関係の必然であり、どんなに苦しくともその必然から目をそらすことなく、その必然を生きているのである。死を透過してはじめて見える「空無の世界」を〈今ここ〉の一刹那に写し込むことで感受される「時間、空間を含めた真実」を、「最後の自由」を、生ききったのである。

だからこそ岩井にとって、意識を最後まで自分で支えることができるかが、「最後の自由」を生きる焦点となったのである。といっても単なる意識の有無が焦点となったのではない。日常的にはわれわれには意識があるといっても、未来の成果によって生の意味を外化して捉える限りは、絶えず未来を指向していることにはかならず、現在はその手段としての行為に縮約されるのみであり、〈今ここ〉の生は空虚なものになるのであり、いわば〈今ここ〉に意識は内在化していない。そうではなく、生きるということは「密度の問題」なのであり、〈今ここ〉の生の内的密度、内的充溢こそが、〈今ここ〉の生に意味を内在化することなのである。だからこそ意味ある生を生きるための必要条件が、意識を自分で支えることなのである。

岩井「結局……意識が自分で支えられなくなっていくということは……僕にとつての死なんです。

これまで僕は、意識というのは「死」とは別物だと思っていたんです。ところが……ほとんど一致だということがわかってきましたね。まず……ほとんど一致だなあ。」(417頁)

松岡は、この了解こそが想定しうるかぎりの最深部の了解であり、もはやこれ以上を聞くべきではない、テープを止める時が近づいた、それが自分に残された礼儀だと思った。しかしこう語った後、岩井はさらに驚くべき提案をする。自分の意識がこれからどのように混濁していくのかを自分自身でギリギリまで確かめてみたいから、その手伝いを松岡に依頼したのだ。松岡にとってそれは「あまりにもせつなすぎる最後の計画だった」のである(421頁)。

4 死の受容

不断に自己物語を語り直し、生きられた世界を物語として対象化して、そこに視界を限定し自己を固着させて生きることは、われわれの日常的な生のあり方である。物語を作り出す対象化のまなざしは、未来の成果を〈図〉として主題化し、それと相即的に〈今ここ〉の生を〈地〉として背景化するのであり、そこでの生の意味は未来の成果にとっての手段としての行為へと縮約されている。無限の出来事のなかからの取捨選択と時間軸上の配列によって構成される物語は、語り直しによって別の物語にもなりうるという偶有性をもつものだが、特定の物語へと視界を限定してあたかも確からしく見える未来へと自己を固着させることによって、偶有性を隠蔽しているのである。こうした点で、自己実現をめざすような自己物語によって見出される生の意味は、自己の死を、そして他者の死をも意識外へと排除する「自己欺瞞の砂上に構築されている」ものなのである⁽⁸⁾。

だが、いつ死が訪れてもおかしくないということになると、もはや未来は自明のものではなくなり、今まで自己を固着させてきたその自己物語の偶有性が露呈するだけでなく、そもそも未来が不在になることによって、意味の物語化自体が不可能になる。物語を作り出す対象化的まなざしが解体することにより、〈今ここ〉の生の全体性を行為へと縮約することが不可能になり、〈今ここ〉の生の全体性は、出現しては対象化されずに散乱していく分節化されざる無限の出来事として立ち現れることになる。自己実現という物語によって意味を把持することが不可能になったとき、問われているのは、〈今ここ〉の生に意味を内在化させることであり、〈今ここ〉の内的充溢なのである。

キュブラー＝ロスをはじめ、終末期医療の言説のなかでは「死の受容」の重要性が説かれ、さらにこの言説が浸透した効果として、闘病記などにも「死の受容」という表現があふれているが、その意味はきわめて曖昧だ。「死の受容」とは、単に自己の死を現実的なものとして意識するというのではなく、死すべき存在であることが内側から突き上げてくると相即して、他者もまた死すべき存在として〈今ここ〉で出会っているのだということが自らに浸透してくることではないか。とすると「死の受容」とは、上で明らかにしてきたような意味の転換を指すのではないだろうか。つまり「死の受容」とは、自己実現や自己物語の一貫性といった意味を手放していく苦痛にみちたダイナミックな動きのなかで、死を透過して〈今ここ〉の生をまなざすことにより、〈今ここ〉の生に意味を内在化させることなのではないだろうか。〈今ここ〉の生に意味を内在化させることは、しばしばデス・エデュケーションとして語られるような、「死を意識することで襟をただして今を一生懸命生きよう」という初歩的な心構え論によって可能になるものではない。

未来が断たれ身体性が解体することで、それまでの自己物語としての自己が解体していく。死を見ずえることにより自己を超えた〈世界〉へとまなざしがむか

い、岩井の場合には「すべてを胚胎する空無の世界」へといたり、そこでまなざしが反転して〈今ここ〉の生にまなざしが内在化するのであり、死を透過して見える「空無の世界」が〈今ここ〉の生に写し込まれることによって始めて、〈今ここ〉の生に意味を内在化させることが可能になるのではないだろうか。死を透過して見える〈世界〉を〈今ここ〉と二重化して生きることになるのである。死を見すえて生きるとはこういうことだろう。しがたって、〈今ここ〉の刹那の生は、それだけで完結しているものであり、一瞬一瞬が断絶しつつも、すべてを胚胎する大きな〈世界〉の現れとして必然として感受されるものであろう。そうした〈世界〉の現れとして、自己と他者とが死すべき者として出会っていると感受されるのである⁹⁾。

〈今ここ〉の生に写し込まれている「空無の世界」とは、「すべてを包んでくれる世界」であり、「いまここにいるということ」を「胚胎する一つの世界」である。その世界には、宇宙のすべてをつらぬく大きな法則があり、わたしたちひとりひとりの生は、この世界に、この大きな法則に包まれている。その意味で、人間は宇宙を包含する大きな法則の一環として、「非常に全体的なもの」の一環として存在しているのであり、「人間中心、自我中心主義」の誤謬を犯してはならないのだという。そのために、自分が生かされている他者に気がついていく、その生かされていく他者がどこまで広げられるかが、重要だという。そのためには、「弱さへの共感」、「弱さの論理」が必要だと語る。

岩井「じゃ、そのもう一つ先はいったい何かといえ、これはやっぱり人間の「弱さ」への共感です。自分の弱さへの共感と言ったらいいか、弱さを通しての人間への共感というのは非常に変わりますよね。強さを通しての人間への共感じゃなくてね。

だから、僕自身は、例えば今回の問題にしても、精神力が強いとか、とにかく先生は強いと言われるけど、とんでもないですね。ものすごく弱いし、ものすごくだらしないですね。そういう自分自身の弱さというものの自覚があるから……。その自覚があるから、その弱さを何とかして持ちこたえようとした。そこにはいったい何があるかといえ、思想があるし、哲学があるし、自分で何とかしてその弱さを、弱さとしたままでいいけれども、しかしそれを受け入れた上で、人間として生きられるようなものをつくっていかなければならないということがありますね。弱さを強くしようというんじゃないくてね。」

松岡「弱さのままにというのが……。」

岩井「そうそう。」

松岡「たしかに弱いままの方が、いろいろな起伏、細かいところが……。」

岩井「ひだがね。」

松岡「見えますよね。」

岩井「そうですよ。例えば精神医療センターの若い連中が、僕は死を覚悟して、その翌々日みんなを集めて、まず患者さんの振り分け、それから若い連中に、君はこういう研究をもう少し続けた方がいいとか、いろいろ言ったら、「先生は、自分が死を覚悟したのに、何であんなにわれわれのことを言ってくれるんだ。その優しさはいったいどこから出たんだろう」と、ある女の医者なんか泣いていたというんです。

それは、僕にとっては別に自己犠牲ではないし、努力でも何でもない。ただ、自分自身の弱さを通して他者を見ているからね。だから、やっぱり自分自身の弱さと同時に、他者の弱さも認める、受け入れる。やっぱり他者、その人たちだってみんな弱くて傷ついて悲しいんだ。だとすれば、そこへまず手を差し伸べておこうよ、という形になるでしょう。これは「弱さの論理」ですよ。」（傍点は原文）（218頁～219頁）

自己実現をする主体という物語が解体すると、それまで特定の物語として対象化してきた「世界」が消滅し、自己を超えた〈世界〉と、それが写しこまれた〈今ここ〉の生が立ち現れる。岩井の場合、死を透過することで、すべての存在を胚胎するような大きな全体としての「空無の世界」を、〈今ここ〉の生に写し込んでみたとき、自分が「生かされているもっと大きな存在」、そういうもののなかで「私」は生き、あるいは生きていられるのだということが照らし出されてくるのである。最後の自由を生ききるとは、先に明らかにしたように、〈今ここ〉の刹那の生を完結した全体性として、そしてある種の必然として受動的に感受し、〈今ここ〉の生から問われていることに覚醒しそこから目をそらすことなくその必然を生ききることであった。このような受動的な意味の感受は、主体としての物語が解体し、他者に引き込まれてしまうという受動性が前面化するとともに、〈世界〉が〈今ここ〉の生に写し込まれているということにほかならないのである。

そして〈今ここ〉の生の必然には他者との関係も含まれているのであり、自己と他者との関係は主体的な選択以前の受動的なものとして感受されている。物語としての主体の強度が消滅することで前面化する受動性が、「弱さ」として表現されるのである⁽¹⁰⁾。死すべき存在として自己を感受するとき、自己の弱さに気づく。その弱さを通して他者の弱さを共感するということは、死すべき存在として他者を感受しているのである。こうして死すべき存在としての自己と他者とが出会い、その必然において自分が生かされている他者を感受し、そして、大きな全体としての世界の一部として自分が〈今ここ〉において生かされることを感受することが可能になるのである。

5 生と死の境界線／自己と他者の境界線

〈今ここ〉の刹那の生がそれ自体で完結しているのだとすると、死すべき者としてその刹那に出会っている自己と他者とはどのような関係にあるのだろうか。およそ日常的な物語としての自己と他者が、あるいは、役割としての自己と他者がリニアな時間軸上で持続的なつながりを持っているということではあるまい。そのような物語化された意味や役割存在的意味を脱落させた存在と存在との出会いとはどのようなものののだろうか。

「最後の自由」を生きるといふほとんどありえないような道行きを岩井寛と共にした存在が松岡正剛であった。わずか数週間のあいだに腫瘍がどんどん大きくなることによって人間の機能が奪われていき、神経ブロックのため下半身は運動、感覚ともに麻痺し、脳転移によって分裂病様の症状が出る可能性にも言及しつつ、岩井は松岡に次のように語っている。

岩井「ちょっといまの僕の状態は、回復に向かうとは考えられないですものね。

だから、松岡さんにどれだけしゃべって、それから脳みそがどこまで適応できて死に至るか、ということだと思います。それは覚悟しています。

だから、やっぱりそういう過程をまず克明に、そばで見つめている人は、家族はいるわけですが、それを克明に記載した人というのはあまりいないでしょう。そういう意味では、松岡さんとかやってしゃべれるということは、非常に貴重だと思いますけどね。

それと、人間、精神が、この痛みとかそういうものは、痛いときはどうしようもないのであれですけど、痛みに打ちかてるわけではないので、痛みを何とか食い止めるよりしかたがないですけど、ただ、そういう最中であって、なおかつ自分を見つめ、そして意味ある生きることに対するかかわり方をどこまでできるのかという、それが一つの大きな問題だと思います。」

松岡「私の方がついていけるかどうかわからないぐらい、未踏のところですね。」

岩井「いや、松岡さんだからやれるんだろうと思います。」

……中略、引用者……

岩井「最初は、松岡さんどこまで対話ができるかと。僕は松岡さん好きだから、むしろ松岡さんの人間的なところを優先して、まあ面倒だけどやろう、という気になっていたんです。

これほどまで生きる状態がどんどん、刻々と変わっていく様相を克明に記録したものというのではないわけですね。ですから、そういうものをやっぱり記録してほしいということと、その中で、もう少したつたら、いろいろとぶざまな状態を呈するでしょうけど、そのぶざまさを交えて、どこまで一人の人間が死ぬまで意味を問うことができたのかという、そういうことを書いて

ておいていただければ、自分では書けませんから、ありがたいなと思いますけどね。」(傍点は原文)(302頁～304頁)

岩井は最後まで自己実現を果たそうとし松岡は単にそれを記録する役割を担っていたのだとこのテキストを理解するとしたら、それは誤りである。「意味ある生きることに対するかわり方を、どこまでできるのか」が大きな問題だと岩井は語り、「私がついていけるかどうかかわらないぐらい、未踏のところですね」と松岡が応答し、「いや、松岡さんだからやれるんだろうと思います」と岩井は返す。死すべき存在として互いに〈今ここ〉で出会い、〈今ここ〉の生に徹底的に内在し、その必然を感受してそれを生ききるという世界が展開する。岩井は自らの弱さ、他者に引き込まれてしまう傷つきやすさに気づき、それを介して松岡へと引き込まれてしまうと共に、松岡はそうした弱さを徹底して生ききろうとする岩井に呼び込まれてしまう。しかもこの引き込みあい、「時間、空間における真実」として、「空無の世界」の法則の現れとして感受されているのである。繰り返すが、これが〈今ここ〉の生に意味を内在化するということである。

しかし、以下の語りを見てわかるように、死を透過して見える〈世界〉を写し込むことで〈今ここ〉における必然として感受される引き込み合いは、共感的理解による意味の共有などではない。理解など不可能なほど隔絶し、岩井の苦しみは松岡には理解できないし、理解できずにその場でこわばってしまう松岡の苦しみは岩井には届かない。生と死の境界線をぎりぎりまで突き進むにつれ、自己と他者との役割存在的意味の境界線は消失し、異質な者として無媒介に曝され合っていくことになるのである。その引き込み合いを見ておきたい。

岩井は、顔じゅうに腫瘍ができてきて、それを切るかどうか検討しているのだが、これからだんだん顔があちこち切られてきて、いろいろな痛みが出てくるという状況の自分というものが二十四時間離れないと語り、次のように続けている。

岩井「でも、まだ僕はいいんだろうと思うんです。というのは、非常にさめた目で見ていでしょう。で、自分の悪化していく進行を確実に追っているわけです。だから、人によると、「よくそんなことができる」とか、「ああ至難なことだ」とか言う人もいるけれども、僕にとってはそうじゃないんで、それは自分の人生をあくまでもきちんと見つめている……だけなんです。」

松岡「自己凝視……。」

岩井「やっぱり……ミクロコスモスにおけるドラマを見なければ……マクロコスモスは見られないですものね。……マンダラじゃないけど、やっぱり胎蔵界をきちんと見られないと、金剛界も見られないということになるでしょうね……(そのまま絶句)。」(411頁)

ここでの遣り取りについて、松岡は以下のように記している。

「つい、私は黙ってしまった。これまで、どんなときも、どんなにくだらな合の手でも欠かしてはいけなとおもいつづけていたのに、この一番かんじんな瞬間に、「間」をあけてしまった。そして、大事な大事な、この日の話はここで終わってしまったのだった。

それまでずっと下を向いたままわれわれの話の成立を応援していたいさみ夫人と鴨下さんの緊張がくずれ、体が動いた。先生は満身に力をこめ、眼をしっかりと閉じ、口元に万感を封印して、そして静かにウウウと鳴咽していた。やがて鳴咽は小さくうなる地響きのように昂まり、^{たくせん}謫仙の糸で縫った脛から涙があふれはじめた。

ついにいっさいが堰を切ったのだ。どんな軍勢力を誇る軍隊も、この堰を切ってあふれ出たものを止めることはできなかった。先生の号泣はワーグナーの交響曲よりも、マーラーの交響曲よりも大きく耳に響いてきた。

「ありがとうございました……」。先生の手が少しのびた。夫人の手が先生の涙をぬぐった。先生のもうひとつの手がのびた。私の手が先生の手をぎこちなく握った。鴨下さんが立ち上がっていた。春が、あらゆる春が呆然と立ち上がった。

「どうも……どうも、ありがとうございました」。先生の声は、そこで限度いっぱいになっていた。そして、私が一番言わせたくなかった言葉にまさかさまに落ちていった。「松岡さんとも、これが最後です」。これがわれわれのマンダラ胎蔵界なのだった。」(ルビ、傍点は原文)(411頁～412頁)

自分の意識の混濁を自分自身でギリギリまで確かめる手伝いを松岡に頼みたいという申し出があったのは、その後のことである。松岡は、そろそろテープを止める 때가近づいていたと感じ、それが「自分に残された礼儀」であるとも思っていた。だが、松岡は岩井に引き込まれてしまう。松岡は次のように記している。

「壮烈な申し出である。断われるはずはなかった。先生がどこまでも、最後の最後まで、境界線が破れるところまで進み切ろうとしていることは、はっきりしていた。テープを止めてはならなかったのだ。すべては、“ON”でありつづけなければならなかったのだ。

私はこのとき、とても手当てのつかない感情にいた。感情さえ打ち砕かれ、土くれのように散らばっていた。それを拾うことさえ、形にならなかった。」(傍点は原文)(421頁)

即物的な言い方をすれば、死が切迫した今、死の闇に沈むまでにどこまで意識を保ちうるのかを、岩井はおどまな姿をさらしてまでも松岡にチェックしてもらおうとしたのであり、それは限りなく死の近くまで経験しようという試みであっ

た。生の意味という点から言えば、それは意味ある生を生ききる試みであり、死を透過して見える〈世界〉、すなわち「空無の世界」を、〈今ここ〉に写し込み、〈今ここ〉の真実を徹底的に感受していくことによって、生と死の境界線が破れるところまで進み切ろうとする試みなのであった。そしてその境界線が破れそこを進み切ったところまで松岡に記録してもらうことを求めたのである。

生と死の境界線が破れる地点は岩井にとって、そして松岡にとっても、極めて重要な意味をもっている。生きるとはどういうことか、死とはどういうことか、このあまりにも本質的な問題を、岩井は観念的にはなく経験的に捉えようとし、松岡の存在を必要とし、松岡によって記録されることを求めた。死が訪れるとき経験する私は消失するので、私は私の死のかなり近くまでは経験することはできるが、私は私の死を経験することはできない。その意味で「私は死ぬことができない」。死が己ひとりでは完結しえないものであることを岩井は十分にわかっていたからこそ、生と死の境界線が破れる地点を松岡に見届けてもらう必要があった。最も疑う余地もなく根源的に私のものであるはずの死が、私ひとりでは完結できず、他者によって受け止められることによってはじめて成り立つ出来事であり、その意味で死は自己と他者とのあいだではじめて生起する出来事なのである。このことは、最も疑う余地のない私の存在が、すでに他者と〈存在を共にしている〉ということにほかならず、日常的には意識に上らない存在の位相を露わにするものである。岩井は、死を透過して見える〈世界〉を〈今ここ〉に写し込み、他者との関係の必然を感受し、そこに徹底的に内在することを通して、〈存在を共にする〉という存在の位相を生ききったのである。

またその意味でも、生と死の境界線が破れるところは自己と他者との境界線が破れるところでもあった。正確に言うなら、岩井にとって生と死の境界線は分断線ではなく、連なっているもの、「空無の世界」の現れであったはずだ。その連なる様相を見極めることが、すなわち〈存在を共にする〉という位相を生ききることにしているのである。岩井は、おそらくはじめは精神医学者という役割的関心もあって語ることを決意し、松岡は岩井の著作の評論者という立場から聴き始めることになったのであろうが、やがて岩井も松岡も予想だにしない関係が必然のように展開していった。生と死の境界線をめぐってぎりぎりまで進もうとするにつれ、岩井も松岡も役割存在としての意味を脱落させていき、そして、「自分に残された礼儀」すら踏み越えられてしまった「あまりにもせつなすぎる最後の計画」にいたっては、「岩井寛」「松岡正剛」という固有名さえ脱落させていかざるを得なかったのではないだろうか。そこでは日常世界での役割存在的な意味の壁によって画される自己と他者との境界線は破れ、自己と他者とは異なる世界にありながら不可分に接し合っているものであり、絶対的な隔絶に〈共に〉曝されているのである。「感情さえ打ち砕かれ、土くれのように散らばっていた。それを拾うことさえ、形にならなかった」、松岡はそうとしか言いようがなかった。それほどまでに引き込まれ、自己を守る意味の被いが破れ、自己と他者が剥き出

しで曝され合っていることが露わになるのである。生と死の境界線を極限まで生ききろうとすることによって、自己と他者との境界線が踏破され、〈存在を共にするという〉透明な位相、〈共在の共同性〉の位相が露わになるのである⁽¹⁾。

死を限りなく隠蔽し忘却することによって生と死を分断し、自己実現という物語化された意味へと自己を固着させて生きることが今日では日常的な生のあり方である。そこでは物語的な意味、役割存在的な意味によって自己と他者とが分断され、自己の役割存在的な意味を支える役割的存在意味としてのみ他者が立ち現れるにすぎない。死の切迫によってリニアな時間軸が解体し、身体性が解体するにつれ、何かを達成するという能動的な意味を把持することは不可能になる。だが、死を透過して〈今ここ〉の生に内在するまなざしへの転換により、それとは別の位相の意味が感受されることがありうる。そこでは死を透過して見える〈世界〉を生に写し込むことにより、生と死の境界線は破れ、役割存在の意味、さらには固有名までも脱落することにより、自己と他者の境界線が破れるのである。

〈今ここ〉の刹那において自己と他者とが〈存在を共にする〉ことを感受し、根源的な受動性によって自己と他者が引き込み合う必然性を感受するところに、能動の意味とは別の位相の意味、いわば受動的な意味が見出されるのである。言い換えれば、カテゴリーの意味の被いを脱落した剥き出しの存在が共鳴するコミュニケーションのなかに、根源的に受動的な意味を感受しうる。能動の意味の喪失から救われることがあるとすれば、その可能性はここにあるだろう。

注

- (1) Saunders,C. and Baines,M., *Living with Dying 2nd ed.*, Oxford University Press, 1989 (武田文和訳『死に向かって生きる』医学書院, 1990年)
- (2) Kübler-Ross,E., *Death: The Final Stage of Growth*, Simon & Schuster, 1975 (鈴木晶訳『死、それは成長の最終段階：続死ぬ瞬間』中公文庫, 2001年)
- (3) 岩井寛 [口述], 松岡正剛 [構成]『生と死の境界線』講談社, 1988年。以下本文記述において、書名の指示なしに括弧内に記載される頁数は、この本のものである。
- (4) Giddens,A., *Modernity and Self-Identity*, Polity, 1991 (秋吉美都, 安藤太郎, 筒井淳也訳『モダンティと自己アイデンティティ』ハーベスト社, 2005年)
- (5) Frank,A.W., *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, The University of Chicago Press, 1995 (鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手：身体・病い・倫理』ゆみる出版, 2002年, 84頁)
- (6) Frank, 同上訳書, 18頁
- (7) Frank, 同上訳書, 18頁
- (8) 真木悠介『気流の鳴る音』筑摩書房, 1977年

- (9) この論考では、岩井の死生観を記述することや、まして宗教的死生観に焦点を当てているのではない。死に直面することにより、それまでの日常的な自己の「世界」が解体し、自己を超えた〈世界〉が開かれ、その〈世界〉を、生きている今に写し込むことによって〈今ここ〉の生のみずみずしさが開示される。あえて単純化して言えば、日常的な自己の「世界」、死を透過して見える〈世界〉、〈今ここ〉の生の世界、この三つの世界の関係構造に焦点を当てている。
- (10) 身体の感受性の直接性によって私は世界に直一接しているものであり、そこではいっさいの能動的な志向性に先立って他者の苦しみや傷によって自らが傷つかざるをえない。レヴィナスによれば、この〈傷つきやすさ〉こそ主体の根底にある根源的な受動性である。(Lévinas, E., *Autrement qu'être ou au-delà l'essence*, Martinus Nijhoff, 1974 (合田正人訳『存在の彼方へ』講談社, 1999年)) 岩井が言う「弱さへの共感」とは、この〈傷つきやすさ〉と通底するものであるととることができる。
- (11) 〈共在の共同性〉は、意味を共有する共同体、能動的志向の対象として人為的に作られる共同体ではなく、根源的な受動性としての存在の位相で見出される共同性であり、「無為の共同体」であるとも言えるだろう。(Nancy, Jean-Luc, 1999, *La communauté desœuvree*, Christian Bourgois. (西谷修, 安原伸一朗訳『無為の共同体』以文社, 2001年))